慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大学における「ラーニング・コミュニティ」の思想史的研究
Sub Title	
Author	間篠, 剛留(Mashino, Takeru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014.) ,p.188- 191
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成25年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0188

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ente ed esperienze innovative d'Occidente, The Department of the Education Sciences, University of Bologna, Italy, November 2013.（国際セミナー　わざ言語：思考と身体，知と教育における関係性の再考―東洋の伝統と西洋の先進的取り組みの経験をふまえて―［科学研究費基盤研究（B）比喩的な指導言語による感覚の共有と「わざ」の学びモデルの構築（研究代表：生田久美子，田園調布学園大学）］，メインセミナー発表者：Laura Cavana・Rita Casadei（Università di Bologna），生田久美子・安村清美・中原篤徳（田園調布学園大学），中西紗織（北海道教育大学釧路校），若手セミナー発表者：Giovannni Giuseppe Nicosia（Docente di matematica, IIS Serpieri, Bologna），Massimiliano Gallo（Docente di filosofia, Liceo delle scienze umane V. Carducci di Forlimpopoli），室井麗子（岩手大学），尾崎博美（新渡戸文化短期大学），畠山大（作新学院大学），岸本智典（慶應義塾大学・院生），高橋春菜（東北大学・院生））

大学における「ラーニング・コミュニティ」の思想史的研究

間　篠　剛　留

1．本研究の課題

現在米国において「ラーニング・コミュニティ」（以下「LC」と略）という大学改革の方法が注目を集めている。これは，複数の科目を結びつけることにより大学で学ぶ知識にまとまりを与え，学生を共通の仲間関係の中に巻き込もうとするものである。LCは大学におけるラーニング（学び・学術）を問い直す可能性を秘めたものとして注目に値するが，現時点でのLC論は学生のリテンション（継続在籍）向上や学びの質向上のための方策としてLCを捉える傾向が強い。LCの実践家の中には，LCの取り組みがアカデミックな目標に向かっていないのではないかという懸念もある。また，LCに関する議論においては，種々の概念について十分な検討が行われていない。重要な概念であるはずの「ラーニング」や「コミュニティ」が，曖昧なままに用いられている。このような状況では，「ラーニング・コミュニティ」は単なるカリキュラム改革の道具に留まってしまう，あるいは単なるスローガンと化してしまうということになりかねない。

そこで本研究では，LC論の基盤となる思想を歴史的に遡り，各論者の議論の独自性を明らかにしながら，アメリカ高等教育においてLCの主張がどのような意味を持ってきたのかを思想史的に考察する。「ラーニング」に代表される大学における知的営為とコミュニティとの関係を，各論者は，それぞれの時代状況の中でどのように考えてきたのか。この問いを検討することは，LC論の範囲に限って大学を論ずるに留まらない。LC論の範囲にはおさまらないコミュニティやラーニングを検討することで，大学のあり方をより大きな範囲で検討し直すきっかけともなろう。本研究では特に，LCの取り組みの始祖とされるアレクサンダー・ミクルジョン，第二次世界大戦後にLCの実験的取り組みを行ったマーヴィン・キャドワラダーの二人の人物の思想，及び，現代LC論の動向について検討を行う。

2. 研究成果

(1) ミクルジョンのラーニング・コミュニティ論

1927年から1932年にかけてミクルジョンがウィスコンシン大学で運営した実験カレッジは，ラーニング・コミュニティの始祖とされる。ミクルジョンはそこでカリキュラムの一貫性やコミュニティの根本的な重要性への洞察を示しており，それが現代のLCにつながっていると言われる。しかし，彼の議論の独自性はジョン・デューイの陰に隠れ看過されてきた。これに対して本研究は，ミクルジョンが企画・運営した実験カレッジを中心に，コミュニティを鍵とするカレッジ教育をどのように構想していたかを検討した（研究業績④）。

ミクルジョンは人間の生には一定の方向性や単一の目的があると考え，コミュニティの基盤にその目的を想定した。その目的は自明のものではなく，ミクルジョン自身も知り得ないものである。そこで過去や現在の既存のコミュニティを研究し，それぞれに通底する人間的問題を検討する中で，その目的を探求しようとした。単一の目的を設定することは科学や民主主義自体をも批判の対象とすることを可能とした。

また，実験カレッジのコミュニティは学生が世界に対する統一的理解を得るために必要な環境であるとともに，それ自身，統一的理解が可能な一つの単位となっていた。

こうしたミクルジョンの構想は，実践に移されて成功したとは言い難い。しかしながら，高等教育が大衆化しつつあり多様な学生が大学に流入し始めた1920年代，1930年代のアメリカにおいて，そして大学の目的が不安定な時代において，伝統主義対進歩主義という枠組みでは捉えられない構想を提示したことの意味は小さくはなかったと言えよう。

(2) 第二次世界大戦後のラーニング・コミュニティ論の展開

ミクルジョンの実践はあくまで一校限りの実験的なものであり，現代のLCへと直接的につながっているわけではない。1960年代に，カリフォルニア大学バークレー校のジョセフ・タスマンや，サンノゼ州立カレッジのマーヴィン・キャドワラダーらが，ミクルジョンに学んだ実践を行っているが，これも一校限りの実験的なものであった。1980年代にLCが全米のムーブメントになるには，実験的段階から普及の段階へのステップが必要であった。

その役割を果たした人物の一人がキャドワラダーである。キャドワラダーは1960年代の実践を1980年代に振り返っており，1980年代の関心でもってLCを検討している。実験的段階にあった1960年代の実践を，1980年代の時代状況の中でどのように捉え直したか。このことがLC論に少なからぬ変化をもたらしている（研究業績①）。

1980年代は高等教育低落の危機が叫ばれた時代であり，すぐに役立つ知識や技能がもてはやされた。また，この時代には教育の私事化が問題ともなっていた。社会に資することに対する関心は低く，個々人の利益が追求されていた。こうした時代にあってキャドワラダーは，あくまで市民を育てるということを重視し，ジェネラル・エデュケイションないしリベラル・エデュケイションを再興しようとした。そのために，共通の教材に取り組むことを通して知的な一貫性と仲間関係を構築するLCを基盤に据えたのである。

また，教育を重視する教員のコミュニティをつくっていこうというキャドワラダーの姿勢は，現代のLCにつながっていくものであると言える。教員のコミュニティを形成することによって限られた資源で高いパフォーマンスを得るという，近年のファカルティ・ディベロプメントの議論にもつながる要素

が，キャドワラダーの議論には見られる。また，キャドワラダーは高い名声を誇る研究大学ではない高等教育機関を問題としており，その意味で彼のLC論は，LCの取り組みがコミュニティ・カレッジを含むアメリカの多様な高等教育機関に広がる一因になったといえる。

（3）現代アメリカにおけるラーニング・コミュニティ論の展開

最後に，1980年代以降，LCに関する議論の中でLCがどのようなものとして扱われてきたかを検討した（研究業績②）。この作業によって，LC論の特徴のうち日本では注目されてこなかった点を明らかにするとともに，LC論において論ぜられてこなかった点を指摘した。なお，検討に際しては，オンライン学術誌*Learning Communities Research & Practice*に掲載された論考を中心として，LCに関する近年の論考を分析の対象とした。

1980年代以降LCが普及するのに大きな役割を果たしたのが，エヴァーグリーン州立カレッジが1985年に設立したワシントン・センターである。同センターはLCに関する情報を提供し，数多くの大学を支援してきた。そこでは，学生や教員の相互作用を重視して学習成果を上げること，限られた資源を有効に活用すること，及び学士課程教育における知的な一貫性を構築することが重視されていた。

しかしながら，LCに関する近年の論考には，いかにしてLCの有用性を説得的に論ずるか，という問題意識が強く見られる。LCはリベラル・エデュケイションについての考え方を変化させる枠組みを提供するものだと言われるが，この点についての論考は主流ではない。成果主義が強まる現代アメリカにおいて，LC論者たちはLCの有用性を示しながら，大学教育に関する様々な問題を解決しようとしているのである。

社会的背景を勘案すれば，この論調には一定の妥当性があろう。しかし，アウトカムズを明示しようとするあまり，大学教育の独自性が問われていない点に，大きな問題がある。現代のLC論において，大学とそれ以前の教育段階との違いは，学習内容の難しさが指摘されるだけに留まっている。「なぜコミュニティが必要なのか」という問いに対して，大学の独自性を踏まえた答えが提示されることはないのである。

3. 研究成果のまとめと今後の課題

ミクルジョンが考えるコミュニティは，学習材としての意味と，自らが所属するコミュニティとしての意味をあわせもっていたが，これは統一的な世界の理解を導こうとするものであった。これに対してキャドワラダーの考えたコミュニティは，自由な市民の育成のためという目的が強く表れたものになっている。そして近年のLCは，学生をラーニングに巻き込むための装置としての意味が強い。

各時代の論者は，先行する議論を引き継ぎながら，自身の問題意識でもって大学におけるコミュニティについての新たな思想を構築していった。しかしながら，その中で薄れて行った問題意識もある。LCの取り組みがアカデミックな目標に向かっていないのではないかという懸念もある中では，そうした問題意識をもう一度振り返ってみる必要があるだろう。特に，ミクルジョンの論ずるようなコミュニティの捉え方は，多文化主義の隆盛の中で各大学がLCを運営する際には，学ぶところも多いと考えられる。

最後に，今後の課題を二点挙げておこう。一点目は，ミクルジョンの思想を，実践と照らし合わせて検討することである。本研究では，ミクルジョンの「コミュニティ」と「ラーニング」の捉え方について検討を行った。しかしながらそれは，報告書に書かれた抽象的な理解である。アーカイブ資料も参照

し，実態に即した検討を行うことが，今後望まれる。もう一点は，現代のLC論を，LC論以外の議論の動向と重ね合わせて検討することである。近年，大学教授職の機能を議論する中で，教授活動を行う教員のコミュニティについても検討がなされている（研究実績③）。こうした議論とLC論とは無関係ではないだろう。両者が重なり合いながら，議論が展開されていくはずである。その中で新たに見出せる可能性を，今後検討していきたい。

4. 本プログラムに関わる研究業績

（1）論文

①間篠剛留　「マーヴィン・キャドワラダーの大学教育論――低落と私事化の時代におけるラーニング・コミュニティ」『関東教育学会紀要』第40号，2013年，1–11頁。

（2）学会発表

②間篠剛留　「現代アメリカにおけるラーニング・コミュニティ論の特徴と陥穽」大学教育学会第35回大会自由研究発表（於：東北大学），2013年6月2日。

③間篠剛留，原圭寛，翟高燕，塔娜「ポスト・ボイヤーのスカラーシップ論」日本比較教育学会第49回大会自由研究発表（於：上智大学），2013年7月6日。

④間篠剛留　「Alexander Meiklejohnの大学教育論における「コミュニティ」概念の検討」教育哲学会第56回大会一般研究発表（於：神戸親和女子大学），2013年10月12日。